

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 7 日現在

機関番号：14401

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25370104

研究課題名(和文)自作品の上演における演出家、ドラマトゥルクとしてのブレヒト

研究課題名(英文)Brecht as director and dramaturge at the productions of his plays

研究代表者

市川 明 (Ichikawa, Akira)

大阪大学・文学研究科・名誉教授

研究者番号：00151465

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,700,000円

研究成果の概要(和文)：演出家としてのブレヒトは「演出演劇」という概念の対極にいた。彼にとって演劇はさまざまな分野の専門家たちによる集団作業の産物であり、「総合芸術」だった。演劇作品は舞台上で完成するという考えから、稽古中にテキストに改変が加えられた。1922年に始まった彼の演出家としての仕事は、映画監督やラジオ放送劇のディレクターを含む総括的なものだった。1920年代のエーリヒ・エンゲルと舞台美術家カスパー・ネーアーとの出会いは、スイスの『アンティゴネ』上演(1948)やベルリナー・アンサンブルの仕事に続いていく。彼らとの共同演出において、ブレヒトはドラマトゥルクの役割を果たした。

研究成果の概要(英文)：As a director Brecht stands diametrically opposed to the concept of "Regietheater" (director's theatre). In his view theatrical work is a collective work of specialists of different arts and therefore a "Gesamtkunstwerk". Brecht is convinced that a play is only finished on stage and that therefore the text has to change permanently during the rehearsals. His work as director begins in 1922, and also features projects as film and radio director. His encounter with Erich Engel and Caspar Neher in the 1920s leads to a co-operation which lasts up until the performance of "Antigone" (1948) in Switzerland and the works in the Berliner Ensemble. In co-direction with both of them Brecht plays the role as dramaturge (literary director).

研究分野：演劇学、ドイツ文学

 キーワード：ブレヒト ベルリナー・アンサンブル 演出家・ドラマトゥルク チューリヒ劇場 叙事詩的演劇  
 上演モデルブック 放送劇

### 1. 研究開始当初の背景

市川明は基盤研究(B)「プレヒト、ヴァイゲルとベルリーナー・アンサンブル1949-1971」(H22-24)の研究代表者として、ヴァイゲルの死までのベルリーナー・アンサンブルの実態を追った。この間の共同研究の中で、隙間のようなものも見えてきた。プレヒト研究で未開拓の分野は、1920年代の初めにミュンヘンとベルリンで始まったプレヒトの演出家、ドラマトゥルクとしての仕事である。エーリヒ・エンゲルとカスパー・ネーアーとの出会いは特に重要で、亡命をはさんでスイスやベルリンでの上演(演出家、ドラマトゥルク)の仕事に結びついていく。プレヒトが演出を担当した1948年のチューリヒとクールでの上演はほとんど研究されていない。プレヒトが叙事詩的演劇を確立するために作った上演のモデルブックについても詳細な検討が必要である。こうした劇場の仕事の中にプレヒト演劇の本質があると考え、プロジェクトに取り掛かった。

### 2. 研究の目的

プレヒトは若いころ、シンガーソングライターであり、下町に自分の人生を見出していた。小屋掛け芝居や大道芸などのサブカルチャーと交じり合い、醸成されたパフォーマンスへのパトスは、プレヒトを若くして舞台演出の仕事や映画の製作に駆り立てた。プレヒトは自らを Stückerreiber (台本書き) と呼んだが、彼の劇作はすべて上演に向けられたものであり、常に上演現場にいることを求め続けた。本研究では、青年期のプレヒトの演出家としての活動を追い、プレヒトの演劇創造の原点を探るとともに、プレヒトが亡命から帰還後、スイスやベルリーナー・アンサンブルで行ったワークインプログレスの方式や、若手演出家養成のためのドラマトゥルクとしての役割を研究する。劇作家プレヒトと向き合う、批判的な考察者としての演出家・ドラマトゥルク、プレヒトの姿を浮き彫りにすることによって、プレヒト演劇の今まで見えてこなかった全体像に迫る。

### 3. 研究の方法

(1) シンガーソングライターから舞台演出家へ  
シンガーソングライターとしてのパフォーマンスがプレヒトのすべての演劇創造のモデルになっていることを示す。レヴュー『赤い干しぶどう』(1922)などの演出から、小屋掛け芝居やカバレットなどのサブカルチャーの影響を実証する。  
(2) 映画製作者プレヒト  
演出家プレヒトは舞台だけではなく、映画の製作者・監督でもあった。プレヒトは若いころから無類の映画好きで、驚くほどの映画の知識を持っていた。カール・ファレンティンと作った『床屋のミステリー』(1923)などを通して、表現主義の無声映画の影響を探り、

演劇と映画を結ぶモダニズムについて研究する。集団創作の原点とも言うべき映画『クーレ・ヴァンペ』(1932)についても創作過程を追う。

(3) 『エドワード二世の生涯』『男は男だ』などの演出

フォイヒトヴァンガーと共同で行なったマールウの改作劇の演出や、1930年代初頭の『男は男だ』の演出が、叙事詩的演劇の理論形成に重要な役割を果たしたことを明らかにする。ライブパフォーマンスを前提とした詩作同様、プレヒトが自ら上演するために戯曲を書いたことを実証する。

(4) 放送劇作家・演出家としてのプレヒト  
『イエスマン、ノーマン』『バーデン教育劇』などの教育劇は、もともとラジオ放送劇として書かれたものであり、プレヒトが演出家としていわば「演出スコア」のようなものを作っている。メディア演劇のパイオニアでもあるプレヒトの演出家としての像に迫る。

(5) ドラマトゥルクとしての役割

『都会のジャングル』(1923)、『三文オペラ』(1928)など、プレヒトがエーリヒ・エンゲルの演出の下で務めたのはドラマトゥルクであり、プレヒトなしに上演が実現しなかったことも明らかにする。このスタイルはエンゲルと共同演出したベルリーナー・アンサンブルでの上演にも引き継がれるが、分業体制の実態に迫る。

(6) プレヒトと総合芸術

演劇は総合芸術であり、さまざまな芸術のスペシャリストの総和として生み出される。舞台美術家カスパー・ネーアーの果たした役割を個々の上演を通して明らかにする。プレヒトが行なった集団創作における演出家・制作者としてのプレヒトを探る。

(7) プレヒトと俳優

プレヒトがアメリカ亡命中の1945-47年に、俳優チャールズ・ロートンとの稽古を通して『ガリレオ』の台本を作り上げ、演出(実質上の)・上演したことは、のちのワークインプログレスの方式につながる。プレヒトのこうした演出スタイルの原点を探り、同時にプレヒトが俳優を想定しながら、台本を書き、改訂していったことを示す。

(8) 1948年のスイスでの演出

ベルリーナー・アンサンブルの仕事の重要な準備作業となったクールでの『アンティゴネ』演出と、チューリヒでの『プンティラ旦那と下僕マッティ』演出を探り、俳優との確執を乗り越え、いかに自己の叙事詩的演劇を確立していったかを研究する。モデルブックの成立についても探り、その重要性を論じる。

(9) プレヒトの上演理論と若手演出家の養成

ゲーテやシラーを国民的な文学の模範と仰ぐ東ドイツ政権党の文化路線と対決し、プレヒトはレンツの『家庭教師』(1949/50)を演出し、『原ファウスト』(1952/53)にドラマトゥルクとして加わっている。プレヒト

が社会主義リアリズムとは相容れない独自の演劇を作ろうとしたことを検証する。彼の叙事詩的演劇が、パリーリッチュ、ヴェックヴェルト、モンクなどの若手演出家に引き継がれていくことを明らかにする。

#### 4. 研究成果

##### (1) 2013 年度

ブレヒトの教育劇がブレヒトの演劇・上演理論の形成にどのような影響を与え、演出家としての実践の土台を築いたかを探り、俳優との共同作業や討論の中でワークインプログレスの形で台本が進化していく過程を追った。

具体的には第1に、『イエスマン/ノーマン』の研究に集中的に取り組み、アウクスブルク、シカゴ、大阪の3都市を結ぶ国際プロジェクト「ブレヒト・ハイスリー」の日本代表として、台本・演出を担当し、『谷行/イエスマン』の上演に力を注いだ。3都市をライブとオンライン・ストリーミングで結ぶ世界初の試みで、2月に日本公演とドイツ公演が実現した。この作業の中で、原作となった能『谷行』とクルト・ヴァイルの学校オペラ『イエスマン』音楽のないリブレットとなったブレヒトの教育劇『イエスマン/ノーマン』の比較や異文化接触に関して調査・研究を進め、演出家としてブレヒトが目指した「了解」という中心テーマに迫った。

第2に、『ガリレイの生涯』の三つの稿、デンマーク稿、アメリカ稿、ベルリン稿を比較する中で、それぞれの稿の世界初演である、スイス、アメリカ、ベルリンの上演を探った。チューリヒでの初演が感情同化的な演出で、ブレヒトの意に沿ったものでなかったことや、ロートン、ブッシュとの稽古の様子を記した記録を調べ、ブレヒトの叙事詩的演劇の理論が、稽古の中で検証され、浸透していったことを示すことが出来た。ガリレオの長い自己断罪のせりふを三つの稿で比較することで、上演における効果をブレヒトがどのように考えて改作していったのかを細かに指摘した。

##### (2) 2014 年度

ブレヒトが亡命中に書いた劇作品の世界初演がどのように行なわれたのかを、チューリヒ劇場での四作品の上演を中心に探った。『肝っ玉おっ母とその子どもたち』『プンティラ旦那と下僕マッティ』などの上演はブレヒトが目指した叙事詩的演劇には程遠く、感情同化的な俳優術が大きな妨げになっていたことを明らかにした。ブレヒト自身がチューリヒに滞在し、演出に関わった1948年のプンティラ上演における俳優とのさまざまな確執についても探った。12月の阪神ドイツ文学会のシンポジウムで、『抵抗の美学 ブレヒトとチューリヒ劇場 1933-48』のタイトルで報告し、紀要にも論文として掲載された。黄金の二〇年代といわれた1920年代のベルリンの演劇が実践家・演出家としてのブレヒ

トに大きな影響を与えていることをピスカートアの演劇との関連から探った。ピスカートアの劇場・舞台構造の改革や映画の使用などが、ブレヒトの作劇法だけでなく、俳優術や演出法の転換をもたらしただけを『肝っ玉』の上演などをもとに分析した。2月に「ブレヒトの俳優術・観劇術」のテーマで講演し、異化効果の問題を論じるとともに、20年台のベルリン演劇が1933年以降、チューリヒ劇場にシフトしていった様子についても解説した。『イエスマン/ノーマン』に始まった教育劇研究は未完の断片「ファッツァー」の翻訳・上演につながり、ブレヒトの演出家としての原点を探る研究に発展した。開いたドラマ、閉じたドラマの観点から『ファッツァー』とゲーテの『タウリス島のイフィゲーニエ』の比較研究も行なった。異化効果を喜劇的な距離化という観点から考察し、ベルン大学とローマ大学で講演を行った。

##### (3) 2015 年度

当年度の主要な課題は、ブレヒトのベルリナー・アンサンブルでの演出家、ドラマトゥルクとしての活動を探ることだったが、最終年度であるため、包括的、横断的に研究課題に取り組んだ。

第1に、演出家という場合、ブレヒトにとって演劇上演だけのものではなく、ラジオ放送劇のディレクターや映画監督をも含めた総合的な概念であることを明らかにした。もともとは放送劇として構想された教育劇『リンドバークたちの飛行』や、共同演出で制作した映画『クーレ・ヴァンペ』を通して演出家ブレヒトの姿を追った。独自の映画、ラジオ理論を発展させメディア・シアターの先駆けとなったことを証明した。

第2に、ブレヒトのベルリナー・アンサンブルの活動にとって、1948年のスイスでの二つの演出、『アンティゴネ』(クール劇場)、『プンティラ』(チューリヒ劇場)が重要で、上演のモデルブックを作る出発点となったことを明らかにした。出演女優のレギーネ・ルッツ氏から、インタビュー資料の提供を受けた。8月にチューリヒ、ベルンに資料収集に出かけ、10月に日本独文学会のシンポジウムで「演出家、ドラマトゥルクとしてのブレヒトとスイス」のタイトルで報告した。中身は日本独文学会の叢書に論文として掲載予定である。

第3に、三つのモデルブック、ロートンとの『ガリレオ』の共同作業、『アンティゴネモデル 1948』、『肝っ玉おっ母とその子どもたち』を詳細に検討した。5月にベルリンで開かれた演劇祭に参加して、ブレヒト演劇が現代にどのように受け継がれているのか探った。これらの成果は6月にオックスフォード大学で開かれる国際ブレヒト学会で発表の予定である。欧文の報告書「Brechts Theater global」を3月に出版した。

5. 主な発表論文等  
(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 9 件)

Akira Ichikawa Lietratur und der Krieg. Blick aus Deutschland, Japan und Okinawa. Draigroschenheft 3, pp.14-16 (2013) 査読有

Akira Ichikawa Bertolt Brecht und Fritz Lang - Ueber den Film „Hangmen Also Die“ Bertolt Brecht und das moderne Theater (韓国プレヒト学会編) vol.8, pp.51-76 (2014) 査読有

市川明 プレヒトと広島・長崎 - 『ガリレイの生涯』の三つの稿について 『季論 2 1』 21 号 pp.134-144 (2013) 査読有

市川明 プレヒトと能 - 『谷行』から 『イエスマン/ノーマン』へ 『Arts and Media』 第 4 号, pp.12-35 (2014) 査読無

市川明 プレヒトの『ガリレオの生涯』 - 三つの稿について 『大阪大学文学研究科紀要』 第 54 巻, pp.73-116 (2014) 査読無

市川明 世界市民ゲーテの平和の声 - 『タウリス島のイフィゲーニエ』を中心に 『民主文学』 第 589 号, pp.130-137 (2014) 査読有

市川明 抵抗の美学 - チューリヒ劇場の奇跡 『季論 2 1』 27 号, pp.13-16 (2014) 査読有

市川明 変身のオピウム - プレヒトと日本の演劇における三つの笑いの源泉 『演劇学論叢』, pp.20-41 (2015) 査読有

市川明 抵抗の美学 - チューリヒ劇場と劇作家たち 『Arts and Media』 第 5 号, pp.52-77

〔学会発表〕(計 11 件)

Akira Ichikawa Brecht und No-Theater - „Taniko“ zum „Jasager/Neinsager“ Brecht Festival Augsburg (招待講演) 2014 年 2 月 10 日 Brecht-Haus Augsburg

市川明 日本とドイツの演劇における笑い パラツキー大学日本学科シンポジウム(招待講演) 2014 年 5 月 3 日 オロモウツ、チェコ

市川明 日本の演劇における笑い プラハ芸術大学講演会(招待講演) 2014 年 5 月 6 日 プラハ、チェコ

Akira Ichikawa Lachen bei Brecht und im japanischen Theater ベルン大学演劇学科(招待講演) 2014 年 10 月 28 日 ベルン、スイス

市川明 かわる - 国際演劇プロジェクト

「プレヒト・ハイスリー」の試み 近畿大学文芸学部(招待講演) 2014 年 11 月 25 日 近畿大学文芸学部 D 館ホール

市川明 抵抗の美学 - プレヒトとチューリヒ劇場 1933-1949 阪神ドイツ文学会シンポジウム 2014 年 12 月 13 日 大阪教育大学天王寺キャンパス

市川明 プレヒトの俳優術・観劇術 シアター・コミュニケーション・ラボ大阪(招待講演) 2015 年 2 月 26 日 江之子島文化芸術創造センター

市川明 宝塚歌劇とドイツ語圏演劇 - 表現主義から『エリザベート』まで 小林一三記念館(招待講演) 2015 年 3 月 1 日 逸翁美術館マグノリアホール

Akira Ichikawa Brecht und Japan/China. Der Weg zum epischen Theater ローマ大学独文学科(招待講演) 2015 年 3 月 16 日 ローマ、イタリア

市川明 ゲーテからプレヒトへ - ドイツ演劇の現代性・今日性 京都女子大学(招待講演) 2015 年 10 月 21 日 京都女子大学

市川明 演出家、ドラマトルクとしてのプレヒトとスイス - 1948 年の二つの上演を中心に 日本独文学会シンポジウム 2015 年 10 月 4 日 鹿児島大学郡元キャンパス

〔図書〕(計 8 件)

市川明(共訳) デュレンマツト戯曲集、第 2 巻 鳥影社 685pp 2013 年

市川明(共著) 夢を奏でたワーグナー 読売新聞大阪本社企画事業部 83pp 2013 年

市川明(編) ワーグナーを旅する - 革命と陶酔の彼方へ 松本工房 254pp 2013 年

市川明 タウリス島のイフィゲーニエ 松本工房 208pp 2014 年

市川明(共訳) デュレンマツト戯曲集、第 3 巻 鳥影社 666pp 2015 年

市川明 ハインリヒ・フォン・クライスト 『こわれがめ』 松本公房 400pp 2015 年

市川明 ゴットフォルト・エフライム・レッシング 『賢者ナータン』 松本工房 688pp 2016 年

Akira Ichikawa(Hr.) Brechts Theater global. Matsumoto-Kobo 288pp. 2016

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：

国内外の別：

取得状況（計 0 件）

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

取得年月日：

国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

市川 明 (ICHIKAWA, Akira)

大阪大学名誉教授

研究者番号：00151465

### (2) 研究分担者

( )

研究者番号：

### (3) 連携研究者

( )

研究者番号：